サステイナブル・コミュニティの視点からみた高齢者のための団地再生計画の研究

写真投影法による高根台団地の考察

STUDY ON A REGENERATE PLANNING OF HOUSING ESTATE FOR ELDERLY
PEOPLE IN THE VIEW OF SUSTAINABLE COMMUNITY

An observation on Takanedai housing estate through means of projection images by photography

曾 英 敏*, 延 藤 安 弘**, 森 永 良 丙***

Yinmin TSENG, Yasuhiro ENDOH and Ryohei MORINAGA

This research is concerned with the sustainability of a community during the replanning and redevelopment of a large housing estate. Its aim was to make a deep and accurate investigation of elderly people's perception of their home and environment. Through participating in a series of presentations, they could relate experiences passed on from generation to generation.

The method adopted was "Projection Images by Photography (PIP)". This made it possible to become acquainted with their every-day lives and their thoughts through revealing their "favoured features", "greatest concerns" and "most significant memories". In this way, it was possible to identify key issues for the future regeneration process. The research describes the principles of a "three-dimensional round circle" process - "situation", "relation", "intention" - that would achieve genuine sustainable community development.

Keywords : Sustainable community, Projection Images by Photography(PIP),
Representation, Commemoration, Sentimental value

持続可能なコミュニティ, 写真投影法, 再表象, 共同的記憶, 情緒的価値づくり

1. はじめに

1. 1 研究の背景と目的

昭和30年代に開発された大規模な公団住宅は、建て替え期にある。しかし、近年の建替計画は、均質化・匿名化した建替計画を居住者との対話を経ないまま住民に提示するのが殆どである。「原野を切り開いて建設された」陸の孤島¹⁾ 高根台団地。殆どが30歳前後の若い元気な人々の住む団地であった。住民が心を合わせ、団地を育み、素晴らしい環境を創り上げてきた。40年時が過ぎ、この人々が高齢者といわれ、「建て替え」の声におびえ、心身の衰えと老いの行く末に心を痛めている。」と居住者がつぶやいている。

Wapnerの説「環境の中の人間 person-in-environment」では、「人間と環境とは相互に影響し合いながら1つのシステムを形成している」と指摘した¹⁾。突然出現した「モノ」しか対象としない建替計画による急激な変化が、安定していた団地の「人間-環境システム」の均衡を崩す可能性があると同時に、新しい環境への移行には「危機的移行」を引き起こす恐れもある。本研究では、計画段階からそうした問題の解決を図ろうとする目的から「サステナビリティ(持続可能性)」という概念の必要性を重視する。

1992年リオ地球サミットの精神に基づくイギリスの地域政策

『Local Agenda 21』に拠れば持続可能な開発(Sustainable Development)

とは、我々が次世代あるいは更に長期的にわたる活気的で健全な環境にたいし深い気配りをすることである。又、その意味においては質的生活の向上や人々に対する公平的な扱い、そして社会的、倫理的次元においても人間幸福の側面などを包含しなければならない、…この意味を達成するには叡智にみちた住宅地の設計が必要不可欠である。」^{注1)}。日本では、岩村が「未来の建築の方向性が持続可能な社会の構築に資する建築のあり方を探ることに集約…」とまとめている²⁾。実際、サステナビリティという概念は60年代の津端の設計理念から伺える。彼が「高根台団地はマニュアルなき時代の公団の初心に、私は里山の雑木林に埋まったニュータウンを構想し現代の長い水田コミュニティを再現しようとしたものだ」^{注2)}。

これらをふまえつつ、本研究におけるサステナブル・コミュニティ(持続可能な団地のあり方)とは「居住者の持つコミュニティに対する強いアイデンティティを生かし、既存の団地環境におけるハード・ソフト両面での居住資源を彼ら自ら未来のコミュニティへ継承し、団地の未来像に向かって事業主体と参加型リジェネレート(再生)計画づくり^{注3) 3Q)}のプロセスによって共に創造していくこと」と定義する。本研究の目的はこれを検証することである。

1. 2 心理的評価の手法としての写真投影法について

写真投影法は、80年代の都市化にあって、文化精神医学者である

* 千葉大学大学院自然科学研究科 大学院生・文修

** 千葉大学工学部都市環境システム学科 教授・工博

*** 千葉大学工学部都市環境システム学科 助手・博士(学術)

Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Chiba Univ., M.A. Prof., Dept. of Urban Environment Systems, Faculty of Eng., Chiba Univ., Dr. Eng. Research Assoc., Dept. of Urban Environment Systems, Faculty of Eng., Chiba Univ., Ph. D.

野田正彰によって初められた子供たちの精神世界にどのように都市の環境が取り入れられているかを写真を通じてみる調査法である⁴⁾。以来、内面の意識を通じて空間あるいは景観を評価する道具として活用されてきた。そこで、調査対象者と空間の関係性を解明する方法として写真投影法の有効性は認められているが、「心理的側面からの推測の域を出ない」と写真内容を定性的な分析によって行う久・鳴海らが「直接的に空間の評価が問えるような形に修正を加えることが妥当…」とした。例えば、コメントを写真に添えて提出させることや分析対象が個人イメージかパブリック・イメージかの目的によって手法の選択が必要と提示した⁵⁾。また、上山、土肥の論文では「被写体を研究者が読みとる形で行われているが故に、評価が定量化しにくい」という限界に対して、彼らが物理的条件を重視する方法や対象者の意識を扱うことのできる手法によって定量的分析手法の方法論的改良の試みを行った⁶⁾。実際、計画学における心理的評価の手法では写真投影法の他に、SD法の限界や価値観による個人差などの問題点を提起し、認知心理学や現象学的手法を空間の評価基準に応じられていた讃井が「目的意識によって心理学の研究手法も異なってくるべき…」と指摘し、設計に役立つ研究者がもつべき基本的問題意識へのスタンスの重要性を明示した⁷⁾。

1. 3 本研究の方法的特質

計画学のこれまでの諸成果に対して、本研究は写真投影法をサステナブル・コミュニティづくりの実践的寄与とその定義を検証することに活用した。また、上記の既往研究に示している写真投影法の制約条件に対して、本研究は団地再生計画に資するために、インタビュー調査と写真発表会を加えて援用した。インタビュー調査は対象者とのコミュニケーションによって、写真が持つ意味をより正確に捉えるための質的分析へのアプローチである。心理的評価の手法として使われてきた写真投影法は写真発表会を加えることによって、コミュニティを育む手法として発展させられ、団地コミュニティの再生計画にフィードバックするものとする。即ち、本研究における写真投影法は従来の単なる評価としての道具からまち育て活動^{注4)}^{3②)}の一手法に発展させ、新たな役割を課すことによって従来の限界をこえる試みである。

2. 調査概要

2. 1 対象地域の特性と現状問題

千葉県船橋市高根台団地(図1)は、昭和36年に入居開始、4650戸を有する公団賃貸住宅である。これまでの本研究によるフィールド調査の結果^{注5)}によれば、この団地では40年に及ぶ長い生活の中、豊かなみどり環境が生成されていると共に、居住者による活発な住民運動の成果がより緊密な人間関係を育んできた。もう一つの特徴は高齢者数(65歳以上)が全人口の20%に迫り、今後5年間で、3~4人に1人が高齢者となる^{注6)}。そうした実情の中でお互いに助け合う必要から四つの自発的な福祉団体が結成され、船橋市23区の中で最も高く評価されている。また、高齢者の急増につれて介護保険の対象から外される層が多く、福祉行政の挟間を埋める役割としてボランティア活動はなくてはならない存在である^{注5①)}。一方、団地の居住資源は沢山あるが、つながりが弱く生かしきれていないのが現状である。特に建替計画案の説明会(平成12年春)が行なわれてから、隣りの引っ越し、空き家、環境問題、友人離れ…

その荒れた空間が、豊かな宝物をつくった住民に投影して、彼らは精神的に非常に大きなダメージを受けはじめている。

図1 高根台団地全体配置図

2. 2 調査方法

そうした状況をふまえ、本研究調査は、撮影された写真内容について、質的分析法と量的分析法両方を生かす折衷的な方法である⁸⁾。既に述べたように写真投影法は居住者の住環境にたいする「心理的空間」を現像するための方法であって、基本的に写真の質的意味を正確に把握することが本研究法の重要な役割であるが、多数の写真対象の全体傾向性を把握するために量的計算にも検討してみた。

まず、調査対象者は本研究の目的に即して有意抽出法を用い、団地全体65歳以上の高齢者(1562名)を代表する標本を、属性別(表1に示す性別、住宅タイプ、家族構成、空き家の多少、地域参加活動の有無)から28名を選び出す。また、各属性の抽出については、自治会、サークル、福祉団体等を通じて意図的(写真発表会に参加できる人かつ、地域で活躍している人を選ぶ)に選出するという典型調査であるため、属性ごとの対象者の人数は一致していない。現地調査において、高齢者にレンズ付きフィルム(27枚)を渡し、

表1 調査対象者

対象者	性別		住居タイプ			家族構成			空き家の多少	地域活動	写真発表会
	男	女	板状	ポイント	テラス	1人	夫婦	それ以外	空き家が多い	活動有り	発表者
U.K	○										○
K.K	○					○	○			○	
S.N	○						○			○	
T.M		○				○				○	
N.K		○				○					
N.G		○						○			○
H.H		○					○				○
M.T		○					○			○	
M.K		○					○			○	○
Y.T		○					○			○	
Y.E		○					○			○	○
Y.O		○					○		○		
Y.S		○					○		○		
Y.M		○						○		○	
A.H		○					○				○
A.R		○		○			○				
I.S		○		○		○				○	○
U.H		○		○				○	○	○	
O.S		○		○			○		○	○	
K.T		○			○			○	○	○	
S.H		○			○	○				○	
S.K		○			○		○			○	
S.S		○			○			○			
S.M		○			○		○		○	○	
T.N		○			○		○		○	○	
T.T		○			○		○		○	○	
M.M		○			○		○		○	○	
M.S		○			○		○		○	○	
合計	17	11	14	5	9	5	17	5	8	21	7

「好きなひと・こと・もの・ところ」「困っているひと・こと・もの・ところ」「思い出のひと・こと・もの・ところ」を撮影してもらい、一週間で回収した。フィルム28個全数回収したが、欠損写真を除く総写真枚数は603枚で有効写真は80%弱(603/756(28個×27枚))である。次に、現像してから写真を見ながら一人に2時間～3時間のインタビュー調査を行った。こうした手順は写真1枚ずつの「意味」(動機、意図、物語)を調査対象者自らの意味づけを引き出す。さらにその意味に基づき、写真分類を行う。図2のように「好き」「困っている」「思い出」のそれぞれを(A)写真対象の属性(ヒト、コト、モノとその空間の広がり範囲)と、(B)調査対象者の意識(個人の関心、他者との関わり、社会的共感性とその空間の広がり範囲)という2種類に分けて、分類する^{注5②)}。本分析は、基本的に写真の質的意味の把握に赴くが、写真対象の属性(A)や調査対象者の意識(B)における全体傾向性や空間的分布状態を構成比的にも見ることにより、質的意味の重みと位置づけを明らかにする一助とする。

(A)写真対象の属性

図2-1 「好きな対象」被写体分布図

(B)調査対象者の意識

図2-2 「困っている対象」被写体分布図

図2-3 「思い出の対象」被写体分布図

図2 被写体分布図

3. 調査結果の分析・考察

表2は、写真分類及び、インタビュー調査による分析の一覧表である。まず写真対象の「全体の傾向性(タテの意味)」からみると、好きな対象の写真が64%と高く、そのうち自然が39%と最も多い。それは見られる対象としての自然に加えて、植栽や畑など能動的に利用できる場所へ積極的に働きかける対象である(図2-1、写真No.1,2)。困っている対象は24%、そのうち、階段、段差や共用空間の掃除、ゴミ問題などが多く46%を占めている。他には、空き家の恐怖、住宅内部と共用空間の老朽化、管理・整備の杜撰さ、交通・道路システムの問題によるバリアフリーへの要請等が明示されている(図2-2、写真No.3,4,5,6)。思い出の対象は12%となっ

ている。中には、複数の人が同じ場所・同じことを撮ったものが多く見られる。それは居住者の間で共有される思い出となっており、「共同的記憶」⁹⁾として捉えることができる。共同的記憶を形成する要因では、大きく2つある。①空間的特質を背景とするもの(並木、公園など)がまちのシンボルとして記憶を分かち合われている(図2-3、写真No.9,12)。②協働の経験を背景とするもの(さくら公園、公民館など)を自分たちの活動の成果として認識し、それぞれ住民運動で改善したり建設したもので、団地の誇りとして記憶されている(写真No.10)。また、インタビュー調査によるこうした全体の傾向性の意味を示す高齢者の意識の分析(表2の(B))の結果では、個人の関心が45%、植栽や住棟付近の公園、花壇、木、個人の趣味など多様なライフスタイルが見られる(写真No.1,2,8)。他者との関わりが26%、地域活動やサークル活動が生活の一部であり、人との関わりを強く求めている(写真No.13,15)。逆に、あまり人と交流しない人の原因は交流が嫌いではなく、出会いのきっかけがないと語った。社会的共感性が29%、主に共用空間における環境問題であるが、その理由としては「交流が少なくなったこと」、「昔のような近所付き合いを取り戻したい」と指摘する(写真No.4)。また、団地の高齢化や、生活環境におけるバリアフリーの問題を配慮するため、自らボランティア活動参加への積極的な態度を示している(写真No.3,14)。

次に、「属性別の特徴(ヨコの意味)」であるが、まず、住棟タイプからみると、板状型の特徴では、木への評価が高く、①ほっと安心できるふるりのシンボル②人と出会いの場③快適な生活を守ってくれると指摘する。だが、自らの植栽スペースへの強い願望を示している。また、管理・整備や無断に木を切ったり、駐車場をつくるために芝生を削ることに対する不満が高い(写真No.9,12)。テラス型は専用庭や玄関の手入れ工夫などが個性的創造的な暮らし方を生み出し、植栽行為を通じてよい近所付き合いができていた(写真No.1)。ポイント型は隣の棟と隣接していないという独立性ゆえに近所付き合いが少ないため住棟から離れたところで人との交流を求める。また、道路側に沿って建てられたため公共の場へのアクセスの便利さによって地域活動に参加しやすい。こうして住棟タイプが高齢者のライフスタイルに影響を与え、植栽を楽しむ場や人と交流するためのきっかけを望むことが伺える。

家族構成の属性について、ひとり暮らしの人が、サークル活動に参加し仲間を求め、生活の充実を追求するひともしれば、交流が苦手といって住居内にこもり、寂しく暮らしているひともしいる(写真No.8)。夫婦とも高齢者の場合では、積極的にボランティア組織の呼びかけをしたり、団地環境をよくするための活動に多く関わったりして夫婦二人の精神的な支えあいが地域社会への関心に反映されている(写真No.10,11,14)。家族等と同居する人が、家族の支えがあるので自己の趣味に集中し、他者との関わりが好きである(写真No.15)。このように家族の支えを得られる人の生き方と逆にひとりで暮らしている人の極端な差が見られる。周りに空き家が多い対象者の場合では、空き家への恐怖感がストレスとなっているため、商店街の店で人とのコミュニケーションをしたり、病院のスタッフとの会話は体だけでなく心もリフレッシュすると語る(写真No.6,7)。最後に地域活動参加では、活動参加している人が、ボランティア活動で人を手助けすることは自分の心も豊かになると生き甲斐を実感

表2 写真投影法による高根台団地の高齢者の住環境の実態及び検証分析一覧表

表2 写真投影法による高根台団地の高齢者の住環境の実態及び検証分析一覧表									
対象者の属性別		(A) 写真対象の属性			(B) 調査対象者の意識 (インタビュー調査より意味抽出)			属性別の特徴 (ヨコの意味)	
		好きな対象	困っている対象	思い出の対象	個人の関心	他者との関わり	社会的共感性		
住棟タイプ	板状型	□29% 自然 住棟付近の水を大事にしながら 植栽できる庭の願望が強い	□9% 管理整備の不適切 ・住棟付近の交通、道路問題 ・駐車場など緑地環境を削ること ・共用空間の管理に不満	□7% シンボルツリー 大きな親木は住棟周辺の人の 共通の思い出となっている	□21% テラスのような植栽スペース を羨望している	□13% 公団が親杏の 剪定した以前は毎年秋に なると周辺の人が集まる と親杏取りをしていた	□11% 団地を取り囲む大きな 木は昔からい草の砂埃、 今は道路からの排気ガスと騒音に 対する防護林となっている	木の意味とは ○◎ほっと安心できるふさふさのシンボル ○◎★人と出会う場 ◎快適な生活を守ってくれる	
	テラス型	□21% 自然とコト ・専用庭があつて植栽行為を通 じて他者との交流が行われている ・ゆとりある歩行空間が安心 できる環境をつくりだしている	□10% 空き家問題 ・庭に猫等が住み着く蚊が大量発 生玄關の戸や部屋の窓を開けられ なく外で立ち話でもできなく近所付 き合いの機会を減らす	□3% よい近所付き合い ・庭で植栽しながら昔からいい近所 付き合いをしてきた ・公園は子どもや孫との思い出、暮 らしの一編	□15% 植栽を楽しむ 空間の広さと植栽・木によ る精神的なゆとり	□7% 平面的な構のつながりと 狭い住棟間隔によるよい 近所付き合い	□12% 前庭と玄關の手入れ工夫などが住 み手の個性を表われている ・人と出会うのきつかけとして植栽 が重要な役割を果たしている	◎ゆとりある空間が創造的な暮らし方を生 みだす ●空き家の問題 ○◎★よい近所付き合いは植栽行為から 始まる	
	ポイント型		□14% 人工物 (公共の場) 住棟付近からより離れたところ で地域活動を求める	□5% 共用空間 住棟出入口の老朽化、階段の幅、 ゴミの問題	□2% 人が集まる公共の場 悪い家、集会所、近隣公園、公民 館前の広場、商店街は思い出のある ところ	□9% 階段室に鉢植えを楽しむ場 を設けたい	□6% 余暇活動を通して人と関 わりしている	□6% 隣との隣接していない という独立性がゆえに住棟付近での 他者との交流が少ないため、団地へ の意識が薄い	★公共施設へのアクセスの便しさによって 地域活動に参加しやすく、また住宅配置 の独立性のため、住棟付近から離れたと ころで人との交流を求める
家族構成	ひとり暮らし	□9% 自然 住棟付近での植栽 公園で人と交流を持つ	□5% 通り階段とゴミ問題	□2% ずっといっしょに地域活動をしてき た昔ながらの仲間	□9% 俳句ノートや花の 日記、ベットの等が寂しさを 和らげるものとなっている	□2% 駅前広場、植 栽や公園でのスポーツ活 動によって人と交流する	□5% 人間関係が薄くなったこ とを指摘、人とのコミュニケーショ ンを強く求める		
	夫婦とも高齢者	□43% ヒトとコト 活発な地域参加と多様な暮らし 方が見られている	□15% 広い関心 自分の周りの住環境のみでなく団 地全体の関心に関心を持つ	□8% ほこりとしての歴史 自分に関わっていた住民運動による 改善された公園、公民館などの場所	□30% 夫婦お互いに畑に合うこと ・関心をもって、他者と の付き合いが活発してい る	□15% 関心をもって、他者と の付き合いが活発してい る	□20% ボランティア、サークルなど積極的 に関わろうとする	○★地域で最も評価の高い福祉活動を結成 ○環境よくなるための活動多く関わる ★夫婦2人の精神的な支えあい地域社会 への関心に反映されている	
	家族等と同居	□12% ヒトとコト 地域活動	□4% 広範囲に関心を持って □7% 空き家に恐怖感 夜の安全問題などの面で (大きな 道を通って帰る)	□2% 地域活動、仲間 自宅から見た団地の風景	□5% 趣味に熱心 □8% 一般の空き家を明るくする ため、共用空間ではじめた 植栽活動	□11% 他者との関わりが好き 他者との交流を強く求 めている	□6% 地域社会に関心向け、何ら かの形で積極的に関わっている	★家族による支えがあるので、生き生き振 出して趣味の活動を行うことができる ●空き家に対する恐怖心がストレスとなっ ているため病院のスタッフやお店の店員 と会話するのはストレスの発散方法である ★人との交流を求める	
地域参加	周りに空き家が多い対象者	□18% ヒトとの会話を求め 病院の医師や看護婦との会話団 地の東側の商店街で、人とコミュニ ケーションを持つ	□21% バリアフリー 自分は団地特有の起伏地形は好き だが足の不自由な人は起伏高低差 が大変と人への思いやり持つ	□1% 自宅から見た団地の風景	□8% 一般の空き家を明るくする ため、共用空間ではじめた 植栽活動	□11% 他者との交流を強く求 めている	□8% ヒトとの関わりが体だけでなく心も リフレッシュ		
	活動参加あり	□57% ヒトとコト 比較的速くまで対象をとる個人 的な関心より広い範囲に関心を持 つ	□21% バリアフリー 自分は団地特有の起伏地形は好き だが足の不自由な人は起伏高低差 が大変と人への思いやり持つ	□10% 自分が関わってきた地域活動 (住民 運動) のなか、人や場所への思い出 は主な思い出のもの	□38% 地域活動のさまざまな様子 仲間の人たちとの生き生 き活動している様子	□25% 仲間の人たちとの生き生 き活動している様子	□26% 地域活動で様々な人や出来事と出会 いために、柔軟心が生成したり社会へ の関心が高まっている	★ボランティア活動で人を助けすることは 自分の心も豊かになると生き甲斐を実感 ○★他者のことをよく気づく地域への関心 が高い	
	活動参加なし	□6% 住居内の写真多い 行動範囲が狭く限られている ところで活動を行う	□3% 住居内と共有空間 お風呂、台所、荷物の収納問題、 階段の段差、道路の段差	□3% 身近な環境 植栽、畑、住宅付近の公園、木、鳩 は主な思い出のもの	□7% ベランダからみえる夕日、 朝日、月は日常生活風景	□2% あまり人と交流しない	□2% 身近な環境のみ関心、 遠くは関心がない	□2% 身近な環境のみ関心、 遠くは関心がない	●身近な環境は殆どの生活空間 ●自己世界に入り込み、希薄な人間関係の なかに寂しさを感じる
全体傾向性 (タテの意味)		全体: 64% ○39%: 自然物 ◎植栽されている場所や畑	全体: 24% ○46%: 望まない人工物 ●階段、段差や、共用空間の掃除、 ゴミ問題、住居内部から玄關等の 老朽化、空き家の恐怖、管理のバ リアフリーを望む	全体: 12% ○93%: 共同的記憶 ◎○木は家族の成長、まの シンボル ○★地域活動や住民運動は団地の 歴史はこりと感謝の気持ち ★○近所付き合いやサークルの仲間 は大切な思い出	全体: 45% ◎住棟付近の公園、花壇、 木、個人的な趣味など多様 なライフスタイルが見える	全体: 26% ★人との関わりを強く求 める・サークルや地域活 動が生活の一部である	全体: 29% ●★共用空間における環境問題は 「交流がなくなったこと」「昔のよ うな近所付き合いを取り戻したい」 と指摘・団地の高齢化や生活環境に おけるバリアフリーの問題を配慮す るため、自らボランティア活動参加 への積極的な態度を示している	○共同的記憶 ◎緑の意味 ●早急住環境改善 ★支え合う状況づくり	

し地域への関心が高い(写真No.14)。逆に、参加していない人は自らの生活空間内の自己世界に入り込み、希薄な人間関係の中に寂しさを感じている。地域活動にうまく関われる人とそうでない人の暮らしが大きく異なって、より多くのひとり暮らしの高齢者を包み込む開かれたコミュニティ活動が期待されている。

こうした分析の結果をタテの**全体傾向性**(表2の(A)と(B))とヨコの**属性別の特徴**によって、さらに類型化してみると、四つの課題が導き出された。①複数の人が共有されている場所やことへの「共同的記憶」(表2に○印)。②住民と共に成長してきた豊かな「みどりの意味」(表2に◎印)。③住環境をめぐる改善を要する問題「早急住環境改善」(表2に●印)。④地域活動参加への積極的な態度や、人間交流を強く求めていることから「支え合う状況づくり(social support network)」¹⁰⁾の必要性が問われている(表2に★印)。そこで、この四つの課題への志向性をより具体的に検証するために写真発表会が行われた。

4. 写真発表会によるコミュニティ・エンパワーメント

写真投影法を通じて、各個人が日常生活の中で何を感じているか、何を望んでいるかという生活の中の価値、意味が表れた個人の「ライフストーリー」が写真に投影されることが把握された。それらは普段無意識に自己の内的世界に潜在しているのだが、カメラを操作することによって意識され、顕在化するのである。本調査ではそうした個の記憶が写真発表会を通して相互交換されることによって居住者間の共感が触発されつつ、共同的な記憶が呼び覚まされ、「我々」

としての自覚を喚起することから「団地のヒストリー」が甦えり、其の存在感(関係性)を認識してから団地再生の関心に向かい、既に検出された四つの課題(持続可能な居住資源)を実証しながらコミュニティ再創造の方向性を促す(志向性)ところにねらいがある。

高根台地区社会福祉協議会と高根台公民館から筆者らへの依頼による「ボランティア講座」と「音楽とまちづくりの響きあうひととき」というまち育ての実践活動が開催され、それぞれの活動において写真発表会が1回ずつ行われた^{注4④⑤) 注5⑤)}。後、大きな反響が寄せられ、団地自治会の要請で再び行われた。2回の写真発表会のワークショップでは、四つの課題の志向性を明確するために7人の発表者が選ばれた(発表者の特徴は表1参照)。

表3は、写真発表会による発表者と参加者間の情緒的变化のプロセスを示すものである。情緒的变化を促す要素とは「私のふる里」「誇りに思う」「記憶を大事に」「小さな気づき」「建て替えの不安」「まち育て」という居住者の感情による志向性の変化と相互作用による創り出した新しい共有的な価値観である。本稿では、こうした感情に志向されてつくった新たな価値観のプロセスを情緒的価値づくりという。以下その具体的内容を分析する。

まず、高齢者が自分の撮影した写真を幻燈でプレゼンテーション(自己表現)する時、「ふる里」について次のような具体的発言が行われた。「私はこの写真を撮って、あーおれのふる里は高根台なんだ。この調査の対象者になっていつものようではなく、心の目で高根台を見ることができた」、「こっちの木は銀杏のなるイチョウの木だったが、こんなもんじゃなくもっと大きい木だった。しかし前

図3 調査対象者の撮った写真

に公団が切っけし、今は銀杏がでなくなっている。銀杏がなっていた頃は近所の人が集って銀杏拾いなどもしていた」（写真No.12）、「これは駅前大きなけやきだが、駅前の再開発で切らなくてはならなくなった。せめて少しでも残したいということで切り株だけでも貰って、プレートをつけて団地の数箇所に置いているが、管理がどうなっているか心配だ。しかしこれは団地と共に育ってきた樺だ」（写真No.11）というように高齢者が「私のふる里」は自分にとってどのような存在かを改めて認識することができた。

「誇りに思う」というカテゴリーの内容では、「これは桜公園だ。この公園には聞くと涙語るも涙の話がある。ここは元々汚水処理場だが、汚水処理場が役目を終えるとのことで皆の憩える公園にしてほしいという声があり、団地だけでなく周辺の自治体が協力し合って実現した」（写真No.10）、「これは居住者名簿だが、このなかに高根台団地の歴史がぎっしり詰まっている。もう一つ高根台団地のお祭りでは、子供たちにお祭りを見せてあげたかった。お囃子がなかったので太鼓サークルを作り、今では大きなサークルとなった」というように住民の思いのこもった団地の歴史が語られた。

「記憶を大事に」のカテゴリーでは、「私は、一階が空き家なので、雰囲気明るくしようと花を植えたんだ。これは5年日記、ノートは歳時記だ。毎日の生活の中で一句できたらここに書いている。これは恥ずかしいんだが、記憶に残るものというのはひとつの心の安らぎになるということが年寄りになって分かったんだね」（写真No.8）。「これは結婚するときに母親から手渡されたちりめんの風呂敷き。次のは行李だ。小物なんかを入れている。貞子と書いてあるのは私の父が書いてくれたもの。それから刀は、まさかなんかあったときには自害しろというわけではないのだが、兄弟4人が一人ひとつずつ貰った」、「現在は本当にたくさんの友達に恵

まれ、忙しいくらいの日々である」とひとり暮らしの女性が自己のライフストーリーを写真で表現しながら、他者に自分の「楽しい生き方」を語った（写真No.13）。

「小さな気づき」のカテゴリーでは、「空き缶拾い」「ちょっとした日曜大工でも」「何もできないが力仕事ならばおれに任せて」という日常生活の中、自分のできることだけでもお互いに支え合うことがよくある（写真No.14）。「建て替えの不安」のカテゴリーについては、「空き家のポストだが、8軒のうち1軒しか住んでいなく、本当に心痛む風景だ。そうした状況の中仲間が引っ越していきなくなり、」（写真No.6）「周りの環境が悪化している今、建て替えより先に改善してほしい」。「まち育て」のカテゴリーでは、「私は子どもの安全措置、駐車場、交通問題など精一杯関わってきた」というように他者に日々生きる意味・豊かさを「プレゼント」しながら、自己の内的世界の顕在化過程が語られた。

発表会の後のワークショップにおいては、参加者から上記の各カテゴリーに対して次のような共鳴が起こり、他人とともに一つの共通の公的世界を分かち合うことのリプレゼンテーション（再表象）の効果が表れた。例えば、「なんと私がしている団地のタカラを他人も知っている。よく同じことを思っているね」、「最近は何となく、周りの人とうまくいってないが、今日この発表会を通じて、人の内面を見せて貰い、みんな同じものをもち、同じやさしい心を持つことがわかったので、これから仲良く人を大事にしたい」「ボランティアとは一人でもまちを歩き、落ちているゴミを拾うことから始まり、やってあげるではなくお互いの人間関係にある」「自分たちが住み続けてきたまちが高層住宅に変わり、40年近くのふる里が一度に壊され、建て替えの不安が地域を襲う」「団地のためのことなら、私でも何となく関わってきたよ。誇りの持てる団地の歴史

表3 写真発表会による発表者と参加者の間の情緒的変化のプロセス

・20, 2, 16 写真発表会第1回 (参加者: 52名)
 ・20, 5, 10 写真発表会第2回 (参加者: 40名)
 ・20, 10, 7 写真発表会第3回 (参加者: 106名)

プログラム		情緒的価値づくり						情緒的変化の概念
		私ふる里	誇りに思う	記憶を大事に	小さな気づき	建て替えの不安	次世代のためのまち	
記憶の呼び覚ましは命のたかり！ （個人別写真発表会・ワークショップ）	自己表現 (presentation) 写真-内的世界	この銀杏の写真を持ってあーおれのふる里は高根台なんだ、駅前再開発で大きな樺が切られるのを涙で見つめながら切り株だけでも持ち帰った	さくら公園、自治会の結成、公民館様々な住民運動の歴史は近所付き合いの積み重ねによるものだ	庭をきれいに、四季折々楽しんだり昔の記憶、今の記憶を大事に、そして暮らしの知恵を皆に分ち合いたい	小さいボランティアだが、空き缶拾い、お父さんのちょっとした日曜大工、何もできないが力仕事ならばお任せ	仲間いなくなるので住み慣れた処から出たくないが空き家の恐怖や周り環境管理が悪化して建て替えより改善してほしい	「私は子ども安全措置、駐車場交通問題等団地のため精一杯関わってきた」「私たちのボランティア活動は市で最も高く評価され」	情緒空間 閉じた情緒投影（感情状態に従う心理的空間）
	再表象 (representation) 他者との共鳴	「なんと私が知っている団地のタカラが人も知っていることに驚き、よく同じことを思っているね」「花、木、太陽、風がぬけた記憶だ」	人の内面を見せて貰いみんな同じものを持ち、同じやさしい心をもつことがわかった	モノを大切にしたり毎日の締めくくりとする日記等Aさんの素晴らしい生き方に感動を受け、生きるとは互いに学びあう事	ボランティアとは一人でもまちを歩き、落ちているゴミを拾うことから始まり、やってあげるではなくお互いの人間関係にある	自分たちが頑張ってきたまちが高層住宅に変え、40年経つふる里がいつにない建て替えの不安が地域を襲う	実は、そうしたことなく、私も何となく関わってきたよ。団地の歴史は人々の努力の結果だが、団地の未来はこれからどうなるの！	自覚(consciousness) 「共に(cum)、知る(scire)」埋まっている可能性を知覚そして瞬間の機が熟する
	共同存在 (coexistence)	大切に育ってきた木から離れたなく団地は自分たちが育ってきたので損なわれないうちにみんなで守ろう	木が太る程幹が深くこの町は人と人の繋がりで造ったものだこれからもっと人間を大事にしたい	高齢化は自然現象であって、緑や人との関わり合い中愛するけやきの木と共にしなやかに生きていきたい	ボランティアは団地の長い歴史の中自治会やPTAを通して育ってきたもので、今日の高齢者にとってなくてはならない存在	今、建て替えをみんなでもよく集まって慎重に考える時期だ、ほこりを持つことで団地の未来像をみんなで努力してつくり	タカラモノのマップをつくらう体力落ちてくるが、もう一度井戸端会議を復活させ、次世代のためのまち育てをはじめよう	共同的記憶 外的世界（現実の生活環境）における過去のほこり、タカラを生きる
情緒の社会化 (emotionalization)		40年長い年月の中自然が育まれてきた	絶えず出会い膨らんでいく人の思いの膨らみがまち育ての種	自然は人間と共に生きる	ボランティアは小さな環境改善と人の気持ちのつながり	公団の計画案を超える「住民の思いやりの提案づくりをスタートしよう」	共通の思い出、発想、みずみずしい感情性は「まち育て」のエネルギー	心の育成 (soul-nurturing) 成長する(activity)ことにより真の展望が望める

は人々の努力の結果だ」というような居住者らが発表者のプレゼンテーションを自分の場合に入れ替え、それによる共(cum)に知る(sire)ことが触発され、自覚(consciousness)が喚起されるようになった。

そうした対話がワークショップの中で進行するが、そこには団地の過去を振り返りつつ未来のあり方へのイメージを分かち合うコミュニケーションの世界が深まっていく状況の中、「大切に育ってきた木から離れたくないように私たちは団地の歴史が育くんできたタカラを損なわれないようにみんなで守ろう」、「木が太くなるほど絆が深く、このまちは人と人の繋がりでつくったもの」、「高齢化は自然現象であって、みどりや人との関わり合いの中、愛する樺の木と共にしなやかに生きていきたい」という共同存在¹¹⁾の共感を呼ぶ関係が生成され、「ボランティア組織の成功は団地の長い歴史の中、自治会やPTAを通じて育ってきたもので、今日の高齢者にとってなくてはならない存在」、「今、建て替えを慎重に考える時期だ、誇りもてる団地の未来像をみんなでつくる努力をしよう」、「タカラもののマップを作ろう。体力おちてるがもう一度井戸端会議を復活させ、次世代のためのまち育てを」。このように団地における共同的記憶が甦えり、団地再生づくりの課題が浮かび上がってきた。

ワークショップ全体を通じて、次の課題が提起された。①「40年の長い間、私たちが自然を育くんできた」②「みんなの思いの膨らみがまち育ての種」③「自然は人間と共にいきる」④「ボランティアは小さな環境改善と人の気持ちのつながり」⑤「公団の計画案を超える住民の思いやりの提案づくりをスタートしよう」⑥「共通の思い出、発想、みずみずしい感情性は我が町のエネルギー」という情緒の社会化が生み出され、このことは団地の再生に向かう心の育成(soul-nurturing)¹²⁾に届こうとするものであるといえよう。

図4 サステイナブル・コミュニティ概念図
写真投影法による高根台団地における環境と時間の関係生成

5. 持続可能な高根台団地の居住資源とは

今回の写真発表会を通じて、居住者の視点からみた団地の居住資源を上記の①から⑥を再整理してみると、(1) ①～③居住者が団地（空間）は、みどり、思い出、人間と時間（40年の歴史）の相互浸透によって育まれてきたことに対し、共通の記憶として強く意識している。(2) ④人と人の繋がりがボランティア活動を促し、相互に助け合う関係を支える共感を孕んでいる。(3) ⑤と⑥建て替えへの不安から次世代のための団地再生づくりへ向かう自覚が生成するという結果が導き出される。そうした結果は前記に検出された高齢者の住環境の実態（表2）による分析の結果と一致しているこ

とが分かった。従って、高根台団地における持続可能な居住資源と現状の課題については図5のように提示する。即ち、過去から未来に向けて、団地の生活と空間、人の心と物の世界の応答を通して、現時点で次のような居住資源と団地再生の課題が浮かび上がっている。

- ① コミュニティに対する強い意識から共同的記憶へ
- ② みどりの意味
- ③ 早急住環境改善
- ④ 支え合う状況づくり

これらを未来に生かすことがサステイナブル・コミュニティ（持続可能な団地のあり方）の実現につながることであり、その継承的側面としては、歴史文化、みどり環境、人間関係などであり、創造的側面としては、高齢者支え合いシステムや次世代育成環境などの新しい社会システムの形成が待たれているといえよう。

6. まとめ

写真投影法と発表会は、高齢者と団地再生をめぐる不安と希望の内実を明らかにすると共に、対話を通して「サステイナブル・コミュニティ」の視点と方法を具体的に検証しえた。そうした観点から本考察全体の要点と今後の方向を束ねてまとめたい。

(1) 総括的にいえば、高根台団地は日常生活に必要な器（物理的インフラ）とソフト（社会的インフラ）を有し、高齢化・老朽化の問題に制約されながらも、サステイナブルな居住空間である。人々は40年間にわたり、自然環境を育んできたためコミュニティに対し強いアイデンティティを持っている。今後のリジェネレート計画においては、団地の高い社会的一体性を活かし、生態系を崩すことのないエコロジカルな視点のもとに、住環境における危機を改善しながら現存のソーシャル・サポート・ネットワークを未来の新しい社会システムとして発展させていくことが重要な方向性であることが分かった。

(2) 本研究による写真投影法への新しい試みを通じて、高齢者の内面フィルムに投影された住環境の特徴が明らかにされることに際

図5 サステイナブル・コミュニティの円環関係づくり概念図

して、次のようなことが得られている(図5を参照)。^①高齢者における現実のひと・もの・こと、ところの相互作用によって生み出されている「状況性」を通じて、彼らの心理的空間に投影されている団地のリアリティを捉え、持続可能な団地の居住資源と問題点を明らかに検出することが有効である。^②自己表現によるプレゼンテーションの触発に対し、参加者のリプレゼンテーションが発生するお互いの応答の中、居住者間の共感が対話の場を紡ぎ出し、そうした「関係性」を通じて共同的記憶を呼び覚まし、コミュニティへの志向性が緩やかに高揚していく。^③共同的記憶は居住者の能動的な「志向性」を促す源であり、対話の場から浮かび上がってくる団地再生計画の課題を抽出・提起し、開かれた討議の場をもつことにより、ハード、ソフトに渡る再生の方向をうかがい、コミュニティ・エンパワーメント^{注7)}の形成に導かれている。このように「写真投影法」を通じて、高齢者と団地再生の「状況性」「関係性」「志向性」の3次元を立ち上げることにより、研究と実践の有効な円環関係づくりの手がかりをえた。

(3) 本研究調査によるサステナブル・コミュニティの円環関係づくりのプロセスを促す要因としては次のように挙げられる。^①写真発表会は時を重ねて行うこと。そうすることによって評価が継続的から共通的な認識として定着される。^②まち育て活動の一プログラムとする。発表会の場合はボランティア講座やまちづくり活動などと重ねて行ったため、居住者間で一定の反響をまねくことができた。一方、本手法の適用における次のような制約条件は、今後の課題としたい。28名のみの対象者によるデータ分析の結果を団地全体の評価として扱いにくい。再生計画案に生かすとするれば、より多くの標本や、属性バランスよく対象者への選出が必要である。

本調査活動を通じて、高根台団地の居住者は自分たちの居住環境に高い認識を持ちながら再生計画づくりに自発的で積極的に関わることになってきている態度や実践的方向が既に生まれてきている。今後は引きつづき住民の実践現場にかかわり、居住者と研究者の相互浸透のプロセスの中、持続可能な団地再生のあり方をさらに追求していきたい。

謝辞

調査にあたり、「高根台団地自治会」、「高根台地区社会福祉協議会」、「高根台公民館」、そして千葉大学自然科学研究科大学院生の渋谷高揚による調査データの整理には多大なる協力をいただいた。また、何より団地の高齢者の方々のご要望に応え、長期間にわたるまち育て実践活動(ボランティア講座、建替勉強会)を住民と共に取り組んできたことによって調査の確実性が得られたことに深謝の意を表したい。

注

- 注1) 本資料の提供はイギリス KINGSTON UPON HULL (City Council) による LOCAL AGENDA21:Sustainable local communities for the 21st century,1993
 注2) 住宅都市整備公団「高根台団地はどのような考えでつくられたか?」、1988,11
 注3) ①本稿におけるリジェネレート(再生建替計画)の意味とは、従来考えられているように全面再開発(redevelopment)、或いは再建設(rebuild)のことのみを意味するのではなく、それは住民各層の生活と空間の保全(conservation)改善(improvement)再建設(rebuild)という三つの領域を含み、その総体を生活及び空間の質

の更新(renewal)ととらえる。即ち、このコンセプトに基づき、建替計画とは、物的空間の再整備だけではなく居住者の暮らしの再建設をも目的とする。

② 文献3①)によれば、参加型計画づくりとは、居住者と事業主体と専門家という三者間の対等な創造的対話の世界を拓くことをいう。所謂、コラボレーションとパートナーシップ方式である。住民の活動プロセスを通じて再生計画づくりを企ていくことにレジェネレートの意味を果たす。

注4) 文献3②)によれば、まち育てとは、市民・行政・企業の協働により、環境(人工・自然・歴史・文化・産業・制度・情報など)の質を持続的に育み、それに関わる人間の意識・行動も育まれていくプロセスである。本研究による高根台地区で行われているまち育て活動は次の通りである。

①「ボランティア講座」週1回、計4回、2000,2月

「ずぼらなていお講座」月1回、計10回、2000年5月から2001年3月まで
 船橋市高根台公民館開設、千葉大学工学部延藤研究室企画・実行

②「音楽とまちづくりの響きあうひととき」2000,7高根台地区社会福祉協議会など四つの福祉団体組織による開催、延藤研究室企画・実行

注5) ① 曾英敏、延藤安弘、森永良丙:コミュニティ・ハウジングの視点による高齢者へのセンシティブな住民を育む活動の評価-団地再生計画をめざして、日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)p46,200,9

② 渋谷高揚、他3名:高齢者の住環境に関するメモレイション、日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)p351,200,9

③ 次世代育成環境の視点については曾英敏、他2名:子どもの目に映る既存団地の住環境に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)p208,199,9

④ 高根台団地のみどり環境の考察については澤村武志、他3名:公団住宅の領有空間形成に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)p131,199,9

注6) 都市基盤整備公団千葉地域支社:高根台のまちづくり、200,5

注7) コミュニティ・エンパワーメントとは、個人が自分自身の生活全般に渡ってコントロールと支配を獲得するのみならず、自らのコミュニティへの民主的な参加にも同様にコントロールと支配を獲得する一つのプロセスである。Karen Grover Duffy & Frank Y. Wong The Community Psychology Simon & Shuster, 1996 (植村勝彦訳、コミュニティ心理学、ナカニシヤ出版、p22,1999)

参考文献

- 1) Wapner, S.: Living with radical disruptions of person-in-environment systems, *IAISS Review*, 9(2), pp.133-148, 1983 (山本多喜司訳、他2名:人生の発達心理学、北大路書房、p30,1991)
- 2) 岩村和夫、他3名:サステナブル建築最前線、ヒオシティ、p3, 200
- 3) ①延藤安弘:これからの集合住宅、晶文社、p.143-160, 1995
 ②延藤安弘:まち育てを育む対話と協働のデザイン、東京大学出版会、p12, 200
- 4) 野田正彰:漂白される子どもたち、情報センター、1988
- 5) 久隆浩、鳴海邦顕:子どもと地域空間の関わりを分析する手法としての写真投影法の試み、日本都市計画学会学術研究論文集、No.27, pp.715-720, 1992
- 6) 上山輝、土肥博至:写真投影法を用いた景観評価の基礎的構造に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集、No.31, pp.395-400, 1996
- 7) 讀井純一郎:「空間の評価基準をとらえる」、日本建築学会編、『建築・都市計画のための空間学』、pp.52-64井上書院 1990
- 8) 北澤 毅、他9名:<社会>を読み解く技法、福村出版、pp.4-17, 1997
- 9) 阿部安成、他4名:記憶のかたち-メモレイションの文化史、柏書房、pp.5-20, 1999
- 10) Jim Orford: Community Psychology -Theory and Practice, John Wiley & Sons, Ltd. 1992 (山本和朗訳、コミュニティ心理学-理論と実践、ミネルヴァ書房、pp.80-112, 1997)
- 11) Viktor E. Frankl: The Unheard Cry for Meaning, Simon & Shuster Inc., 1978 (諸富祥彦、他1名訳、生きる意味を求めて、春秋社、p102, 1999)
- 12) Christopher Day: Places of the Soul, The Aquarian Press, pp.180-188, 1990.

(2000年7月10日原稿受理、2001年7月6日採用決定)